

## 第一次派遣団・第二次派遣団 帰松-4月4日 神谷さだこ

3月21日に出発した第一次派遣団、25日出発の第二次派遣団のべ12人は、26日に無事戻ってきました。

南相馬市は、地震・津波・原発震災の三重苦の中にありました。二本松インターから高速を降りて、走る途中、道路の縁が崩れていました。屋根のかわらが落ちている家もありました。

市庁舎から、一キロも離れていない地域は、津波が押し寄せ、漁船や車が汚泥の中に埋もれていました。家々が破壊されて、粉々の建材が道路を塞いでいました。



この泥の中に眠っている何人の命があるのだろうか、と未曾有の津波の怖さに体がふるえました。



そして、ここは、福島第一原発から20~30キロの屋内退避圏内です。原発から同心円で30キロ圏内と括られたために、ガソリン・食料、支援者も入ってこれなくなりました。風向きからか、松本の3倍程度の線量でした。しかし、屋内退避と言われた住民の不安ははかりしれません。

放射性物質は、目に見えない匂いもない。TVで発表される線量の数値も理解しがたいものです。

私たちは、諏訪中央病院の医療チームが市立病院でお薬外来と避難所の健康診断するのを手伝いました。受付をしていると、それぞれの方の生活背景まで、聞こえてきました。「県外に避難したいが、動けないお年寄りがいる。」「ここで、1週間分の薬をもらったら、その足で、東京に向かうつもりだ。」「義理の父母が見つかり、2日後に火葬が決まった。いま、離れるわけには



いけない。」など等。



原発事故は、まだまだ収まりそうにもありません。何ヶ月先になるでしょうか、もし放射性物質の放出を防ぐことができたとしても、私たちは、事故から25年経っても、修復されないまま残っているチェルノブイリを見てきています。

しかし、避難所の方々に伝えてきたことがあります。

子どもは、充分に気をつけ

ましょう。できれば、遠くに避難してほしい。でも、40才

を過ぎた私たちは、防護しながら、冷静に生活しましょう。ベラルーシの埋葬の村で、ジジやバァバがたくましく暮らしていた事を話しました。

今回のように、原発被災地にもおじけずに入っていたのは、20年間のJCFの活動の積み重ねがあったからだと思います。

また、第3次派遣団を4月8日出発で準備しています。乳幼児・児童のいる家族を優先して、松本に避難してもらおうよう手配しています。福島第一原発が、一日も早く沈静化することを祈りつつ「できることを粛々と」と心の中でつぶやく毎日です。

チェルノブイリ連帯基金オフィシャルブログより